

明治三十一年十二月二十六日 禮拜日

明治三十三年九月十五日 禮拜日

目 次

社 説

◎南清の動亂

論 説

◎宗教的品性とは何ぞや 楠

龍 造

社 會

◎厦門暴動と東本願寺◎天主教徒の勢

力◎外交不振◎外教の傳道◎世論の趨

勢◎十五議會と宗教法案

雜 録

◎北游雜記(承前) 文學士 本 多 高 陽

會 報

◎近角氏の消息◎印度饑饉義捐全報告

◎廣島有志の檄

改教時報

第三十九號

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政 教 時 報

南清の動亂

北清地方は久しく驚天動地の大活劇を演しつゝありしと雖も、南清一帯の地は李鴻章、張之洞、劉坤一、等を始め、其他の督撫等も皆慎重の態度を取り、局外中立の儀を守り、各自に封内鎮靖に注意せしを以て、久しく動搖の禍を免れしは、人道主義上幾莫の功德なりしや勝て數ふべからざるものあるのみならず、我帝國の利益上亦最慶賀すべきに足るものありなり、然るに其北地の擾亂も當に緒につかんとする頃に當りて、端なくも南方に於て搔擾を來し、排外熱を高め、我國に於ても其毒鋒にかかり、爲に一度は陸兵を渡清せしめんとし、又俄に其送遣を止むるなど、大まかを演じたりといふ、而して今や南清の排外熱は益劇甚を加へ、福建省南部は我帝國の勢力範圍なりと誇稱する所なるに、汀州府、龍巖州等の耶蘇會堂は已に匪徒の爲に燒却せられ、漳州府の白溪浦、南沙、漳州縣の善封、龍溪縣の山兜、新墟等に在る會堂は目今危急に迫り、涼浦縣の山城に在る會堂は該地方の二十四鄉社連合して破壊に着手せりといふ、其我邦に關すると、名譽と利益とに於て、決して尠少なからざといふへし、去れば北清地方の對清態度に於ては、假令一派の論者の如く、單に各國の意向に注意し、何事にも協同的運動に洩れざらん事を之れ努むる

○政教時報第三十八號目次

- 社 說 基督教徒の望む◎社會事業(其二)
- 論 說 北海道教育策 (本多學士)
- 社 會 內務省令と東本願寺等
- 雜 錄 航運日誌◎參會雜記 (百目木劍虹)
- 信 象 四相觀 (五城學人)
- 會 報 各地の教信

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
 二、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
 三、本誌代金は必ず小爲替にて送送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
 四、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は、本郷森川町郵便貯金爲替取扱所一宛の事
 二、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部
 東京市本郷森川町一番地

明治三十三年九月十四日印刷
 明治三十三年九月十五日發行
 發行兼編輯人 上村幸三郎
 印刷 清水朝太郎

とするも、南清地方に於ては、我國の勢力範圍にあるだけ、各國とは利害を別にすれば、其善後策に於ても決して各國の後にもみ附伴すべからず、必ず獨立の見地に住し、自由意志に由て行動せらるべし、已に是等に關して臺灣民政局長も、厦門領事も上京せりと言へば必ずや一定の對清策も決せらるべしと雖も、余輩をして一言其所思を述べしむれば、此度の事變に處するは、現在損害の大小等のみによるべからざるは勿論、先づ事變の由來、又將來の名譽利益等を打算せざるべからざれば、其原由と覺しきものを擧ぐれば、後藤民政長官は曰く、

元來日本人は、平常厦門に於て、清人の感情を害しつゝ、われば、今回の暴動は特に指示すべき程の原因を有せず、要するに平素感情を害したる積漸の破裂のみ云々
 又東京期日新聞の特派員報じて曰く

(上略)是より先排外熱就中排日熱 冥々暗々の間に、漸く其氣焰を高め來りたりき、是れ要するに北清事件に對する日本の態度が、飽までも清國と共に列國に當るならんと信せしもの、其一たび起て兵火相見ゆるや、日軍先づ太浩に先登して勇名を轟かし、其天津を攻陥するや、日軍又主力となりて敵を追まくれり、是に於てか、上海附近の清人は先以て日軍の態度を疑ひ、續て漸く波及して、南清一帯の排日熱となり、更に激して今回の厦門暴動の素因を爲したる者の如し

北清動亂の波及せしと一口に言はゞ夫迄なれど、以上の如き

事情も亦無きにあらざるべし、以上の二説互に相容れざるありが如しと雖も、日本人が平日廈門邊の清人の感情を害し居れる事も之れあらん、これ吾人が平素聞く所に思ひ合しても然うか思はる、節なきにあらす、されど今回の擾亂を天理教徒の専横に基をせるものなれば、東朝記者のいふ如き事情もあるべし、孰れにしても膺懲を嚴にして、益清人の感情を激し動揺をして愈大ならしむるあらば、我國威の消長に關するのみならず、從來着手せる利益線に於て、教育線に於て、宗教線に於て(是等の命名を用ひ得べくんば)加之我臺灣に迄も影響を蒙ることは殆どいふべからざるものあらん、去れば威壓固より必要なりと雖も、懷柔の必要も亦忘るべからず、威壓に於ては彼二十七八年の日清戦役に於て、又北清聯合軍の日軍の目覺しき働きに於て稍足れりとせん、されば南清に於ては固より隘機の處置は必要なりと雖も、大体に於て懷柔政策に出でん事を希ふものなり、

以上の政論は姑く措くも、余輩が大聲天下に訴へんと欲する所のものと、宗教家就中佛教者の舉動にあるなり、今回廈門動搖の血祭として、東本願寺の説教所を焼却せられたり、是固より、清人の誤解より排外熱を起し、其手始めとして、斯る暴動に出でしものにして、曲は彼に在り、怨を買へるも亦日本全体にして取り分け本願寺に對して憤怒せるものにもあらざる様子は、上に掲げたる後藤長官、東朝記者等の言にて推し得らるゝなり、然れども實際利害の關係者なるを以て、此際に於ける佛教者就中東本願寺等の舉動は大に注目を惹く

に足るべし、是に至りては余輩は大に支那佛教の根本の動機より論せざるべからず、若し支那佛教の動機をして、眞個に宗教の本義に基き、墮落せる人類を救済し、闇黒界理に靈光を注ぎ、枯渴せる凡惡を濟さんとらば此際に處する方法決して多途あらざるなり、迷へる者は之を覺まし認れる者は之を正し、愚なる者は之を諭し、暴なる者は之を和げざるべからざるなり、之れ當に佛教者の盡すべき任務にあらざるや、若し本願寺が布教の精神にして此處に住せず、此盡すべき任務を盡さず、其布教は唯裝飾的なるか、若くは商賣主義にありとせば、其説教所の燒夷せらるゝ素と自業自得と評せんのみ、元來支那人は無智の頑民にあらす、本來迷謬愚暴なるにはあらざるなり、清人が彼が如く頑冥に敵愾心に驅られ排外熱に浮されて、妄動非舉を敢てするに至りたるものは、彼天主教徒が口を博愛を唱へながら、自己の同宗者のみを偏愛して、異教者を憎惡し、陥害に陥れて以て石を頭上に擲ち、人類凡て等しく天父の子孫なれば咸く同胞兄弟なりと揚言しつて、只管自己の同人種にのみ親昵して、異人種を視ること、蛇蝎の如く犬豚の如く、之を輕蔑し之を汚辱し之を排斥す、獨や佛や此嫉妬深き妄執偏愛心を利用して、其種民政器の先鋒たらしめ、彼等宣教師の後援として銃砲船艦を準備し、以て彼等の舉動をして放恣を極めしむ、斯くの如くして、人は教匪と化して既扈跳梁を究めしめ、土は朝に一港夕に一灣を失はしむ、誰か之を視て憤慨せざらん、彼團匪拳匪の徒其舉動の暴なる憎むべしと雖も、其衷情憐むべきものなしとせざる

なり、或は彼徒を以て我邦維新前に於て、勤王攘夷と稱し、猥りに排外の氣に驅られ、暗殺燒討を事とせし浪士輩に比する者あるは適評といふべし、去れば是等の匪徒固より懲さるべからずと雖も、彼宣教師輩の舉動も亦人道を蔑視するものなり、宗教は素と人類を救済するを本とするにも拘らず、却て人道を蔑視し、人類を苦むるの舉動あらば、眞心の宗教者は其救済策を講せざるべからず、佛教を清國に布教せんと

ならば、少くとも彼良民を教匪の苦患より救済するは目的の一たらずんばあらざるなり、然るに佛教の南清に布教せらるるや、忽ちにして佛教を匪の名目も生じ、彼國の官民には寧ろ嫉惡せられんとするの傾きあり、南方の動搖せんとするや其説教所は手始として燒夷せられたり、是恐くは美に懲りて胎を吹くの類にして、多年耶蘇教宣教師に懲りたる彼れ清民は始より疑心を以て佛教を迎へ、佛教亦日本政府の後援を恃みて布教すと邪推せるは確に一因たるを信するなり、然れども開教以來二ヶ年有餘にして迫害に遇ふ事數々、彼等をして日本佛教布教師は、眞個に人類救済の爲に來りたるを知らしむるに力めずして或は横暴なる教徒を庇護するものなり、侵略主義の先導者なりと彼天主教宣教師と同一視せらるゝものなりとせば、其誤解を招く所以即赤心を人の腹中に置くことの至らざる責なしとせざるなり、須く深く再顧三省すべきにあらざるや、

りといふ、佛教家も平常無事の日に當りては、其眞心を顯はすに難かるべし、今回匪徒の迫害を被れること却て好き時機なれ、茲に靜かに其善後策を講すべきなり、

佛教家其本分として人を責めずして、己れを責むるの雅量有らば、宜しく各自に戒愼を加へ、今後の布教には一層彼等の疑訝を避くるを注意すること勿論、宗教宣布の上に於て佛教にもあれ、耶蘇教にもあれ其宣傳に際して、漫に歸依者の頭数を多からしめんが爲に、自教徒の非行を庇保回護し、他教徒を排擠して以て官民の厭嫌を招くが如き行爲を爲すあらばこれ當に清國の平和を害ふのみならず、人道主義に背馳せるものにして、決して宗教者にはあるまじき罪惡たるなり、故に佛教者は此際相一致して正々堂々とて、宗教宣布上に規律を設け、若し宗教者と非宗教者間の争訟の起る如きあらば公平無私の裁判を受けしむべし、宗教者會に加入せるものなりとて、之を庇保せんこと決して然るべからざるなり、是實に世界的問題、人道主義の鼓吹なり、或は言はん、佛教者の清國布教なる者は、名は美なりと雖も、其實兒戯に等しきものにして、天主教などの如き大勢力と同日に論し得べきものにあらす、されば何程正義論を唱道すとも決して行はれ得べきにあらざれば、慙に大言壯語して不面目を買はんよりも、其身の程を量りて、沈黙を守らんには若かじと、然り其言理なきにあらざるも、此唯二五の十たるを知りて未だ二五の七たるを知らざるの言なり、余輩は唯人道の爲正義の爲に云爲せんことを主張するのみ、成敗利鈍に至りては豫め知り得

べきにあらざるなり、行はれずとも我之れを主張して我之れを守らば決して救しき所あらざるなり、況んや前にも言へる如く、世は威歴と懐柔と並び行はれざるべからず、政府の處置も懐柔策に出でん事を望むや切なりと雖も、假令政府は威歴の方策に出づるとするも、宗教者は固より忍辱柔和を以て本とすべきに於てをや、余輩は茲に世界の平和の爲、人類の爲、正義の爲、佛教家は主義の新舊を問はず、宗派の異同を論せず、相一致して、清國布教の旨義を明にし、進んで宗教宣布に横暴の行はるゝを抑止せんことに努力せん事を勸告する者なり、(九月八日記)

論 説

宗教的品性とは何ぞや

楠 龍 造

宗教家とは如何なる品位性格を有すべきものなるや、これは一種の天才にしてある特殊の人のみに有すべきものなるや、また一般の人にも有すべきものなるや、而して其品位性格なるものは果して貴重すべき價値あるものなりや否や、吾人は之を研究することの決して閑事業にあらざるを信するものなり、然るに此事の研究をなす前に當り、先づ宗教とは如何なるものなるを決定せざるべからずと雖、これは極めて深遠極めて複雑の問題にして今に至る迄一定の確説なし、之を細論することは今の所要にあらざるを以て畧し、唯だ吾人の取る所

を一言すれば、宗教とは人に究竟的安心を興ふるものにして其人の思想言行を支配する中心となるものなりとせば、宗教家と稱せらるべき人は、如何なるものなりやと云ふに純智力若しくは非常に智識を重する人は、宗教的信仰を得るに困難なり、何となれば智識は懐疑的討究的にして其際涯なし、又無頓着なる人は宗教的信仰を得るに困難なり、何となれば其人は人間の運命に就て熱切なる感想なきを以てなり、即ち信仰は心的作用の諸方面に關係を有するものなるを以て智識の材料を重すると同時に、深感の熱情あり堅確の意志あり、人生の不動の基礎を求め、之に立たんとする人は、宗教家たるの資格を有せり、かかる圓滿なる宗教家なるものは、釋迦基督「マホメット」等の如き人物につきて之を觀察するの必要あり、これらの宗教的人物の品位性格を十分に觀察せば、上にあげたる疑問も自ら氷釋することを得ん、

吾人は此疑問に答ふるがため、先づ釋尊の性格を觀察せんと欲す、釋尊は佛教第一の祖、宗教界の偉人たることは誰人も之を知ると雖、そが生涯の言行は、多く神秘奇蹟の雲霧に閉ざされ、其真相は遙として明白ならず、人間以外の怪物なるなからんやの感を興ふ、嗚呼焉ぞ此の如くにして人間の模範となり指導となり師父となり良友となることを得んや、迷信を以て愚民の錢財をわづめ、怪談を以て文盲者を喜ばしむるをこととする、腐敗的佛教者の一部は、神秘的釋尊は却て自己に好都合ならんも、真正に宗教の眞意義を識認し、教祖の品性を自己に實現せんとする、熱實なる佛教者にとりては、

玉を求むるに石を與へられたるの感なくんばあらざるなり、歴史上に於ける釋尊の生涯、釋尊の言行を研究し、其性格を知るは極めて重要な一事なり、固より今日より之をみれば、年代を去ること二千五百餘年、然かも國を異にし風俗を異にし習慣を異にし言語人種を異にする釋尊の言行を以て、直に今日吾人の模範指南となす難きものあらん、熱帶國の法衣は到底其儘にて温帯若しくは寒帶國の法衣となす能はざる如く、亦釋尊兩期(Vaicha or rainy Season)に安居して説法したればとて、吾人は梅雨の候に必ずしも安居せざるべからざる必要ありざる如く、必ずしも其儘採用するの必要なし、要は唯だ其精神をとり、之を時處位の關係に隨ひ、適宜により之を實現するにあり、

漢譯の經典西人の著書中の釋尊に關する部分をよみ、畧々釋尊に關する大體の智識を得らるべし、固より年代と云ひ場所と云ひ其他此の如き歴史的事實は、其正確を期せんこと極めて困難なりと雖、この大體釋尊の如何なる人物なるやは、之を彷彿するさまで難事にあらずと信ず、吾人は今釋尊一生の行動を叙し、單に之を列記するに止まらず、見る所を以て評せんと欲するなり、人或は云はん、此の如きは釋尊に對して不敬なるものにあらずやと、吾人答て曰く然らず、夫れ人高く聳る山に對するも一種の感想あり、長く流るゝ河に對するも感想あり、人間に對するも感想あり、釋尊に對するも感想あり、人にして若し物に對して感想なからんか、枯木のみ頑石のみ何ぞ人と稱するを得ん、吾

人は此感想を述べんと欲するものなり、釋尊の盛徳は大海の如く、吾人は其中に棲む小魚の如しとするも、小魚は小魚だけ大海の水を呑納せざるべからざるなり、若し呑納し得ずと云はんか、これ死魚のみ、釋尊の本意豈人をして枯木たらしめ頑石たらしめ死魚たらしむるを欲するものならんや、而して吾人は釋尊の生涯を三期に分て

(一) 誕生より十九歳迄
(二) 十九歳より三十成道迄
(三) 三十歳より八十入滅迄
此間に於ける彼の言行は如何なりしか、彼の人物は如何なりしか、之を觀察せんと欲す、
思ふに宗教的偉人と稱せらるゝ人物に關しては、一般の人々の思惟し居る所のものを考察するに、或ものは思はく、古來宗教的人物と稱せらるゝ人は、多くはこれ荒誕奇怪、風を呼び雨を起し空を翔り海を飛び、殆んど常人のなす能はざる所のものをなし、愚言を眩惑するの言行のみ、これはこれ一種の妄想にあらずは詩的想像に過ぎず、若し宗教的人物よりこれ等神通奇蹟の跡を除き去らばあます所果た何者ぞ、平々凡々、一も人民の歸仰を引くべきものなきにあらずやと、或人は思はく、宗教家豫言者なるものは、古代英雄崇拜の時代に當り、多少自己の才智手腕のすぐれたるに乘じ、一の野心家の縦横詭詐を逞したるを、其崇拜家之を粉飾したるものに過ぎずと、或人は思はく、宗教家の性は極端にして決して常人の模範とするに足らず、今日人物を養成陶冶するに教育なる

ものあり、また何ぞ病的人物の教をさくを要せんやと、吾人はこれらの非難に對し、一々此處に答ふるの煩雜を願はざるを以て、唯だ一束して預め注意を乞ふに止むべし、試に思ひ、詭詐の人貪名貪欲の人生涯幾多の困難辛苦を凌て献身的の行爲をなし得るか、己を捨てて衆多の爲にするを得るか、諸君、信仰なき主義なき人は、何處に止るともなく何處を目的とすることもなき、風のまにまに、空中をさまやう浮雲の如し、焉ぞ始終一貫せる行動をなすとを得んや、彼の宗教的偉人と稱せらるる人の一生涯の言行を觀察するに、始終一貫せる信仰主義實行を有し、富貴も嫌する能はず、權勢名譽も誘ふ能はず、白刃犯すべく水火もふむべし、これ豈に尋常人の爲し得る所ならんや、亦詭詐者のなし得る處ならんや、殊に宗教なるものは人心の奥底に根源せるものにして、人生安固の究竟的基礎たるものなり、教育固より必要なり、されど今日の教育なるものは、處世の技術才智を得せしめ、國民の一員なる資格を得せしむるに過ぎず、決して人類として究竟的安心を與ふる者にあらざるなり、これ宗教を待たざるべからざる所以、固より今日宗教と稱する中に幾多の迷信は混在し、其僧侶は腐敗墮落せるを以て、誠に厭倦の情を發するは自然の勢なりと雖宗教は第一に自己に求むべきものたるを知らば、周圍の境遇の何たるに關せず其眞光明を認め、人生の指導とせざるべからざるなり、乞ふこれより一步を進め、釋尊の行爲品格に就てその如何なるものなりやを觀察し、果して人生を導く價値あるものなりや、ある一種の人のみ必要にし

て一般人には必要ならざるものなりや否や、敢て大膽なる觀察を下さんと欲す(次號完結)

社 説

◎廈門暴動と東本願寺 廈門暴動の爲め同地の東本願寺布教所が燒毀の災厄にかゝりしことは、既に諸新聞紙によりて報道せられたるを以て吾人は、茲に詳細を報するの要なしと雖も、本號「社説」に於て論じたるが如く將來支那布教の爲め一小事として看過すべからざる最大事件たるを以て、吾人は煩を厭はず其眞相を記して世人の注意を喚起せんとするも強ち無用の業にあらじと信す

世人は傳へいふ、在廈門東本願寺の燒拂は全く布教師の評判悪しく、從て人民の惡感を懷くもの多く、其結果今日俄に爆發したるものなりと、吾人は容易に此説を信する能はざるを以て、此頃廈門地方布教視察をなし歸朝したる、田中善立師を訪問して親しく其實況を聞くことを得たり、是より曩き同氏の談話として二三の新聞紙に掲げられたり、余輩の聞く所も大體に於て之と差異なきを以て乃ち左に掲ぐ

今度廈門に於ける東本願寺會堂の燒拂はれたるは、布教其の宜きを得ざりしに基くものなりとの攻撃あれど、是れ恐らく清國布教事業に精通せざるより起りたる説ならん、抑も清國內地に布教を始めたるは天主教にして、四十年前より到る所に會堂を設け、熱心布教に従事するも、支那人は

元來保守頑固の性質に富むを以て、容易に外教を信せず、故に百方手段を運らし、陥はしむるに種々の利便を以て、先づ第一教徒たるものに對しては、生命財産を保護する條件を附し、知縣が教徒を拿捕するが如きことあれば、何故に無辜の我が教徒を拿捕するやと嚴談に及び、若し知縣にして直ちに之れを赦さざる時は、領事の手を経て洋務局に談判し、洋務局は其の教徒罪惡著しきものに對して容易に赦免せざる場合に於ては、領事より直に其の國の公使に訴へ、夫れより總理衙門に嚴談に及ぶを以て、終に外交問題を生せんとするに至る、此に於て總理衙門は其面倒を避けんが爲めに、其の囚へたる教徒を赦免するの例なれば、無賴の徒は之を幸にして相率ゐて教徒となり、市街を横行し良民を掠奪する等、暴行に至らざる所なく、隨つて良民なる非教徒は外教を嫌惡すること甚しく、常に暴發の機會を窺ひつゝあるなり、

東本願寺は一昨年始めて廈門、漳州、泉州等に布教所を設けたることなれば、外教が斯かる政治的の意味を以て布教しつゝある事柄と、支那人が私利を擅にする爲めに教徒たるの事情を知るに由なかりしが、扱て實際教民の爲す所を見るに天主教徒と均しく佛教徒も亦同一の利便を得るものと信じ、各所に於て不都合の事を働き昨年中道臺及知縣等より故障を申立て來りたること一再ならざるを以て、始めて教徒中無賴漢の混じ居る事實を認め、大に驚きて同僚協議の上布教の刷新を圖ることに決し、一方無賴漢を破門

すると同時に他方道臺等に對し佛敎は善根を施すの主旨なるを以て、斷然無賴漢を破門し行政上煩累を及ぼすが如きことなかるべき旨を述べたり、爾來教徒の數は減じたるも布教上大の面目を改め來りたれば、非教徒の怨みも今は殆ど全く釋けたるの姿なり、然るに今回廈門に於て我が會堂の燒拂はれたるは一見怪むべきが如しと雖も、是れは或意味の誤解より生じたるものなりと思ふ、开は本年三月の交臺灣の匪魁簡太獅の廈門に遁れたる報あるや、其故郷なる宜蘭の土人某は、簡太獅が漳州某町より兩親に宛て二三度通信しありし由密告に及びたるより、臺灣總督府は直に警部一人巡查二人を添へ、密告者の某と四人にて廈門に渡り漳州に至りしに止宿所なきを以て、漳州の布教所主任高橋警氏に頼みしに、普通の漫遊者と思ひ快諾せしかば、此一行は毎日外出し居りし所、或日終に簡太獅を捕縛し來り始めて總督府の警部なりと姓名を明かし、我々は總督府の命を受け簡太獅及び其の子分雷某を捕縛せんとて來りし旨を告げたりしかば、高橋氏は大に怒り是れど布教所が探偵の手先となりたるかの嫌疑を招く原因となり、前途布教上非常なる妨害を受くることゝなるべく、君等にして匪魁捕縛の爲めに來りしこと豫じめ知られ居らんには一日も留めざりしに於て大に後悔せしも終に及ばず、簡太獅捕縛の報傳はると間もなく密告者は廈門に於て斬殺せられ、其の腹中には土砂を突込み目も當てられぬ慘狀を極めたりといふ、又た雷は山奥に入り込みて未だ捕縛せられざるよしな

るが聞く所に依れば雷は簡の志を継ぎて一旗擧げんとするの陰謀を企てつゝあるよしにて、元來厦門、泉州、漳州は簡太獅の乾兒非常に夥しく、彼等は東本願寺が探偵の手先を勉めたるもの、如く疑ひ、本願寺焼拂ひの風説は此時より頻りに傳へられたるが、今度終に之れを焼拂ひたるは儘かに雷等が主謀となりて無賴の徒を煽動したるに依るべし以上の談話によりて略其真相を窺知すべきなり、加之厦門に於ける暴徒は天主教徒の威をかりて常に良民を苦めつゝあるは今や何人も疑ふべからざる事實なり而して福建に於ける

◎天主教徒の勢力 を示さば、厦門を本部とせる大長老(Mr. Rev. Aranda)以下十三名は福建省の南半に配置せられ老(Rev. Rev. Aranda)以下十三名は福建省の南半に配置せられ大概是西班牙人あり

福州南臺番船浦尾天主堂(Rt. Rev. Misoch)
福州南門外澳尾巷天主堂長老(Rev. Vargas)以下二十四人は福建省の北半に配置す

福州の仁慈堂、ドミニカン派の聖母の組織せるものにして孤兒貧食の救済教育を主とす

其外佛國の天主教徒も各地に散在し、勢力の半固不拔たることは言ふ迄もあし、獨り天主教徒の勢力を有するのみならず、凡ての歐米人が非常の勢力を有することは支那國中にありて此省の如きは最も甚しと云ふ、所謂日本の

◎外交不振 に至ては今更の事にあらずと雖も、事毎に外國の領事等が容喙干渉するに至りては、實に憤慨に堪へ

ざる次第なりと云ふ、曾て專管居留地を鼓浪嶼に定めんとするや、米國領事の故障によりて中止となり其後種々の苦情を惹起せし事もありと云ふ、要するに福建省殊に厦門に於ける排日熱は非常の高度に達し、其結果今回の暴動となり遂に東本願寺説教所の焼拂ひとなりたることは、何人も首肯する所なるべし、是を以て獨り東本願寺のみに罪を嫁するが如きは、抑、誤謬の甚しきものと謂はざるべからず、更に翻て

◎外國傳道 の状態を觀るに、全く政略的に宗教を利用するものにして、純粹の宗教として人道の爲め、將た世界文明の誘發者として熱心其衝に當り、よく宗教家の天職を盡くすものなきのみならず、清國の秩序を破り今日の禍亂を來したるの原因、焉を外教の之か挑發者たるなきを得んや、列國艦隊か太沽を砲撃せし後數日英國首相の演説として新紙の報する要點を記せば

東方に俚語あり曰く「第一に宣教師來り、次に領事來り、次に將軍來る」と、之れ眞なり。最も傳道に熱心努力する國は、是れ國境の擴張に最も熱心努力するの國たることは争ふ可からず是れ實に傳道に大なる障礙なり、支那に於いて殺害せられたる人多くは基督教徒なり、然れども之れ支那人が基督教徒を嫌惡するが故に非ずして、彼等は宣教師を目して其國の政府が希望する所の目的を達せんが爲に利用せらるゝ器械なりとするが故なり。宣教師たるものは道徳を以て自ら守り謹慎を以て自ら職とせざる可からず。と、これ吾人宗教家の意を得たるものにして、宗教家の天職

より之を論ずるも當に如此ならざるべからず、福建省に於ける天主教の勢力強固なるは既に前述せし甚如くた恐るべきものあり天主教の教民と稱するも其實無賴漢の輩が自己の野心階級を逞しうせん爲め、名を教民にかりて強盜掠奪いたらざるなく常に良民を苦めつゝありと云ふ、教民と非教民との間に一種の訴訟起るときは宣教師は領事を楯として善惡曲直に拘らず、我教民を保護するの如きは支那政府を無視するのみならず人民の被むる災害は實に測り知るべからざるものあり、以上の大問題に就て

◎世論の趨勢 を概観するに最も剴切に痛論し少しも假借する所なきは「日本」新聞なりとす、吾人をして其一節を摘載せしめよ

稍々佛教者をラダテたる意なきにしもあらざれども、概して佛教者の此の重要な問題に對して冷々淡々たることは明白なる事實なり、「富士」新聞も此問題に關して左の如くいへり

東本願寺より厦門地方に派遣せる僧侶なるに至ては概ね破戒の徒にして酒色淫靡なる所なく暴戾恣睢にせざる所なしと而して之が僧徒たる者も亦多くは市井の無賴漢としてたゞ教民となれば罪を犯すも雖も政府の捕拿を懼るを以て來て其宗門に投ずるものなりといふ是等の徒相率めて奪掠を行ふ良民たるもの怨憤し不逞の徒は健漢安んぞ機縁其肉を喰はむことを敢てせざらむ今回の事の如き或は原因のこゝに在るなげむや云々

と、是れ儘に東本願寺の布教を非難したるもの、吾人は布教師其者が概ね破戒の徒なりとして強ゆるるゝは、假令事實にあらざるも佛教者の不名譽これより甚しきはなけん、然れども厦門東本願寺の布教所は純然たる布教的宗教を以て任し、敢て政略的に宗教を利用せざることは田中師の談話に徴せば思ひ半に過ぎるものあらむ

要するに今回の出來事は宗教問題として、世界人道問題の提唱として決して等閑に付すべからざる重要事件たり、敢て同感の士に訴ふ

第十五議會と宗教法案

左に東朝の報道を掲げて

(前略)抑も人道の眼中には宗教の區別ある無し、耶穌教にまれば佛教にまれば等の人道に違ふことあらざれば、宗教としての價値固より差等なし。但だ宗教家等の言行又は其の布教の手段に於て、往々人道と相ひ容れざるものあり、此の場合に於て匡濟の勞を執る者は他の宗教家ならざるべからず。支那に於ける耶穌教家の布教手段は亡頼徒の教唆者として天下自ら定評あり、日本の佛教家を同故に其の間に投じて匡濟の勞を致すの決心を爲さざる手、是れ已に一疑問なり。今や當に匡濟の勞を致さざるのみならず、反つて耶穌教の尤に做ひて亡頼徒を容れ、教外の土人より無益の憤怨を受け竟に寺院を燒毀せられたり。事實此に止まらず、凡そ宗教なる者皆其の布教の手段に於て到底人道と相ひ容れざるの觀なからず。況んや、本願寺の燒拂ひに付き僧侶より損害賠償を要求することあらば、宗教家は竟に盜賊の同伴に類すべきをや、日の佛教家たる者此の時大に反省するを要す、特に今回北清事變の原因に付き其の宗教方面より見て如何に運動すべき乎を反省するを要す。

而して同新聞紙の宗教欄記者は重ねて論じて曰く

我國人殊に宗教家は同文國の此状況を見て何の感をか爲す、耶穌教師の監獄教誨に反對し宗教法案の佛耶同一律に取扱はるゝを非難したる佛教家は遂に此増進を賦過せしめんとするが、彼の厦門本願寺の燒拂ひに就て耶穌教と同一の原因を歸へらるゝに至りては沙汰の限りと云はざるを得ず、云々

讀者の注意を促す

第十五議會の開期も程近くなりしが本年も宗教法案の提出あるや否や既に内務省より省令第三十八號及び第三十九號を發布して聊か取締法を設けたれば最早本法案を事々しく提出する必要なきが如し去れど宗教全體の取締に付ては矢張り完全なる法律を要す可ければ政府は伊藤黨の力を借り再提出の内議あり目下嚴密調査中なりと然るに同法案が第十四議會

の貴族院にて否決されしは種々の魂膽の結果もあらんが研究会などは最初より延期説を取り昨年十二月中大概申合せも附き居たり木曜會も同様にて只政府の干渉を恐れ深く秘密を守り居たるなり此の事情は毫も政府の覺知する所とならず獨り岡部、堀田、正親町、三好等諸氏が政府に同情を表したるがため早計にも研究会全體を賛成者中に打算し木曜會も亦松岡、本多、渡邊(洪基)等諸氏の有力家が政府を助くることとなり居たるを以て大丈夫との見込みを抱き之れに欺かれしが山縣内閣の不覺なり本年猶又提出せば充分なる修正を加へ豫め暗流に備ふるに非ざれば衆議院のみにて可決するも貴族院が六個敷からんとなり

雜 録

北遊襟記(六)

本多 高陽

植民教育は大難問である、併し遠隔の外國へ植民か出來た、其植民地の教育を如何にせんかの問題は英佛蘭等諸國の手法が幾らもある、夫に學者の説も随分あるから、是等の理論と經檢とに倣て、其上斟酌して施行するのは比較的容易であるけれど、我北海道の如き、人種も同一で隔絶して居るとはいへ一國內で、マーンソ一讀み立てなくとも誰も承知の通の、植民地、ア一いふ所の教育と來ては習ふべき手本が理論にも實際にも乏しくて却て困難である、之を救ふ良法は僕は前に述

べた方法に上越す仕方はあるまいと確信する、今の教育者や政治家はドーモ宗教嫌の人が多いが、ソナに喰はず嫌ひせすども少しは喰て見ても善からうではあいか、夫から小樽區自身の教育だ、扱此區には先にも述べた通、中學校が未だ無いので、皆々困り果てし居る様子が見ゆる、此所一番佛教者が手を付けて私立中學を始める好機會ではあるまいか、全體佛教者が社會事業に盡力すと言ふ所が、どの地でも同一の事業を行はねばならぬといふ事は無い、其地の状況に隨て急要の仕事から着手せねばならぬは勿論である、北海道は他地方に比して盜賊などは少ない、夫は新開の地で猶賃銀等が高くて内地よりも貧民が生活 仕易いからだといふ事である、其代り北海道で泥棒を働く様なのはよく、非道イ奴と見えて、改心させる事は難事だと申す話である、ソ一と見えて佛教でわれ耶蘇教であれ、北海道で慈善事業で成功したのは未だ見受けない、必要が薄くて功能の見ぬ慈善事業よりも一層急要で有て且奏功の確な事業即教育事業に盡力するのが世益になるのみならず、事業としてやる上には、擇み取るべきである、夫であるから、早く開けた函館ではモーンソ一言ふ鹽梅に形勢が定て仕舞た、此邊は餘程佛教者が盛考すべき點であらう、夫等から考へて見ると小樽に中等教育の機關が缺乏して居るのは佛教者が奮發して充たさねばならぬ順序であらうかと考へられる、併しこれには餘程信用名望のある人が中心に爲りて盡力するのが必要かと考へられる、勿論其地に永住の見込の人が宜しいのである、

多田公巖といふ人は十數年前東京での知り合である、が其後音信相通せず、幾年かを打過ぎた、然るに今度北海道へ來て函館の地で多田氏の消息を聞いて、久しぶりの面會を喜んで小樽へ來たが、何かと俗事に忙しので其折を得なかつた、けれども或日訪問したら、多田君も大に喜んで頗る手厚い待遇をして呉れた其手厚といふのは、僕が尋ねた時、同氏は三四人連にて將に他行せんとせられて居る所有たのを止めて、終日僕の爲に種々有益なる談話をして呉れたのは最僕が大に喜んだ事である、其談話は此所に取ら出で、言はぬが、已に其談話より得た智識を此前に書き述べたことあれば、此後に顯れて來る事もある、同日同席したのは、若松某といふ札幌農學校の卒業生で、多田君と共に北海佛教に盡力せられる人で有て、頗る佛教には熱心である、札幌農學校は萬事亞米利加主義であつて、宗教は耶蘇教が最幅を利かして居て、佛教などは皆無である、其學校を出た若松君は佛教熱心で、農學校へ行てドシ一佛教の談話をせられた、同校の中で佛教の話をしたのは若松君を以て蓋端矢とすといふ事である、又實相寺何某といふ人も訪問せられて、種々面白い有益なる話有た、此人は進歩黨の名士箕浦勝人氏の令兄で有て、當地で今は閑散に暮して居られる、寧ろ清貧を樂むといふ風がある、和歌に長じ、佛法を尊信して佳行が多い、今年の初にも上京せられて、切りに佛教青年會の夏期講習會を北海道で開くべく要求せられた人である、是等の人の四方八方の話にて一日楽しく暮した、

小樽孤兒院 是中島何某といふ人の獨力の事業である、收養孤兒の數は當時十人であつた、一個人にて斯る事業をやるといへば富有な人かといへば、決してソ一ではなく、至て貧人である、是でも事業として遺る上は、慈善といふ事は、強ち富有な人が、手から物を施すといふ事とは違ふといふ事が知れる、其やり方のあらましを述べるには、少しく中島院主の人と爲りを述べねばならぬ、此人は俗に所謂惡にも強ければ善にも強いといふ人であらう、全體北海道は随分こんな事には金を惜まらず出す所なれど、何分中島といふ人の従前は餘り威服の出來ぬ、寧ろ積極的の罪惡までも犯したんであるから、同情を惹くことが薄く、今日の好事業にさへ、助ける人が至て少ない、併し同氏は至て涙もろい性質で、孤兒教育などに打て付けの人物である、此事業を始めてから、其操行は全く改まりて、専ら此事業の經劃に怠らない、近來は區中の少年者を集めて、少年音樂隊を組織し、日々廣告などで市中を回らせ、其利益を以て、漸く院の經濟を支へて居るといふ有様である、併し予は歸京後其消息を得ないから、目下は如何なる景況であるかは、遺憾ながら報知する事が出來ぬ、かの上に述べた所の葬式の前にも音樂を取り行たといふは、此音樂隊である、ドーカ此事業が益隆盛に赴くと祈るとである、之を要するに小樽は佛法は盛な方で、説教は大抵毎日ある、演説も二十日間予の滯留中に三四回有た、婦人教會も有た、

會報

◎近角氏の消息 倫敦發にて去月三十日左の通信に接せり、最も清澤、眞岡兩師に宛て送り越されたるものなり

拜啓時下暑氣相加り申候處愈御壯健に御座被遊候哉小生無事視察仕居り候間御安神被下度候然者先日來時々斷續の報知仕居候等定めし御覽被下候事と奉存候當地着以來宗教制度上實地上殊に學說上等大に研究を要すべき事と存居り候(中略)萬事聞見する所痛心の種ならざるはなし西洋の社會に於ける勢力は實に偉大に御座候か密に察するに弊害も甚しきもの有之哉に察せられ候一方にはタシ方に神學反對派の勢力も有之候様に御座候二十世紀の思想界殊に宗教及道徳界は東西とも大惑亂の時機哉とも妄想致し居り候而もて基督敎は此邊は佛敎よりも困難なるべくと存候併し社會勢力の偉大なる所以のものは實際社會事業に盡力するの原動力によるものに御座候今後佛敎徒は此邊には餘程力を用ゆる必要益感し申候英國の如きトニカク一方に異論あるにせよ儼然として國教制を採り全國恰も日本府縣の如く管轄組織にて固め居り候有様中々保守的國柄とは云へ恐るべき習慣に候日曜となれば紅塵萬丈の市街全く寂寥たる境界に變し教會の鐘聲と參詣の紳士及夫人供徘徊するをみるのみに候英國若來諸種の教會を視察し頗る得る所有之又米國にては十分宗教徒及其實況等視察致候間近日十分執筆の考に御座候百目木兄の書面に通信をすべしとの催促御最に存候併し愈々判斷を下すときは責任のある事故餘程確めたる上にも確聞執筆の考に御座候間暫時御待被下度候

先日來の御報知又「太陽」の記事等によるに宗教調査會の事有之候由蠶蛇的筆法實に困入申候今日宗派自治力を害する如き宗教法は何れの處にても無之事は明白にして昨年宗教法に反對したるも實に々々宗派の爲には好き事に有之候事と私かに佛祖の冥祐を感謝仕居候(中略) 本月(七月)二十五日佛國に至り三十日より養育院依託の代表者として公私救恤會に出席引續き哲學の會九月初め宗教歴史會に出席の上直に獨乙に參り度考に御座候日本宗教界の様子時々御報奉願候是非在英中米英宗教制度及概況報知可申池山君は米より直に獨逸ベルリンに參り申候佛國にて再會の考に御座候西派新法主に而會仕候當時はフルウエー地方に觀光漫遊の由に御座候辱知諸君へ一々書面差出不申候間宜敷御傳被下度候早々拜具、 常 觀

◎佛敎主義 印度饑饉義金募集總額報告

我が佛敎主義雜誌社聯合會が、卒先して其募集に従事せし印度饑饉救濟義捐金は、相互の盡力に依り、意外の好成績を得豫定期間即ち去月三十一日迄に各社に集りたるもの三千八百十二圓六十九錢三厘、去る五日を以て明敎社に會合を催はし、翌六日を以て大學學士會事務所に其全額を送附したり、今各社募集の金額、並に其受取證を左に掲げてこれを報告す、

- 印度饑饉義金各社募集總額
- 一金三千八百十二圓六十九錢三厘 佛敎主義雜誌社聯合會
- 內譯
- 金一千圓也 明敎社取扱第一回分
- 金六百五十二圓八十五錢 淨土敎社取扱分
- 金五百八十八圓五十錢 佛敎新聞社取扱分
- 金五百三十四圓六十五錢六厘 大日本佛敎徒同盟會取扱分
- 金六百六十九圓十六錢五厘 日宗新報社取扱分
- 金六百六十二圓四十七錢九厘 佛敎學會取扱分
- 金百三十三圓六十錢 令知會取扱分
- 金百十五圓三十錢 鴻盟社取扱分
- 金百一十一圓也 寶鏡社取扱分
- 金九十五圓也 救世之光發行所取扱分

佛敎主義雜誌聯合會御中

- 金四十二圓零八錢三厘 佛敎清徒同志會取扱分
- 金三十八圓四十四錢 和融社取扱分
- 金四十二圓八十三錢 勝友業誌社取扱分
- 金二十七圓八十錢 東洋哲學會取扱分
- 金二十二圓也 婦人雜誌社取扱分
- 金二十一圓五十七錢 反省社取扱分
- 金十八圓十七錢 三寶發行所取扱分
- 金十五圓九十五錢 振興會取扱分
- 金二十四圓三十錢 演說會場募集分殘部

甲第三十號 證 一金三千八百十二圓 六十九錢三厘 印度饑饉救助寄附 右正ニ領收候也 明治三十三年九月六日

本郷元富士町一番教師館内 學士會事務所 荒 尾 邦 雄

◎廣島有志の檄

去月廣島地方にて暴風雨の天災にかゝり良民の困難一方ならざるを以て、同地の有志者相計り廣く世の志士仁人の情に訴へ、義捐を募らるゝ由、徳榮寺住職灘尾晃壽氏が當日慘狀の報告に接したれば左に掲ぐ

内到處門戸を閉じ大に警戒を加ふ同四時頃より火防手招集の鐘は鳴り市の南方に位して太鼓を打つあり人聲湧くあり恰も千軍萬馬の一時に襲來せるが如き感をなしぬ謂へらく宇品港の大堤防怒浪の爲めに潰破せられたりと之を聞て人心洶々殆ど爲す所を知らざる者の如し翌廿一日二日兩日實況視察の爲め宇品町に行きしが眼も當てられぬ慘狀なり日本第一の軍港とも云はれたる堅固の堤防約横百八十間堅六間は潰破せられたため其内に在る數百町歩の青田と其田畝の畔に百五十戸の農家ありしが與に怒濤の爲めに破壊せられ漂流され沈没せられ爲めに衣食住を一時に失却し悲惨の境遇に陥落し路傍に(御幸通)露宿して食物に究し我は病を發し老幼號泣………奈何とも名狀する能はず市の救助も及び兼ねたる風情なり云々 (義捐金取扱所は廣島市銀山町一、徳榮寺内)

廣 告

印度飢饉義金 大日本佛敎青年會取次分(第四回)

- 一金八十一錢五厘 越中國中新川郡神田村石川惠成募集
- 一金二十二錢神田村講中 一金四十錢 石川 惠成
- 一金五錢 仲野 富次郎 一金四錢 酒井 宗次郎
- 一金五錢 山崎 庄藏 一金五錢五厘古川 與七郎
- 合計八十一錢五厘
- 內譯
- 一金二十九錢 越中國中新川郡正印村山本久右衛門募集
- 澤田 清次郎 一金四錢 黒田傳右衛門
- 澤田 周三郎 一金十二錢 若杉新村講中
- 澤田 藤作
- 合計二十九錢
- 越中國中新川郡織田村岩田清次郎募集
- 一金五十六錢

內譯
 一金十錢 寺西 作助 一金四錢 武田 富次郎
 一金十錢 寺西 財太郎 一金四錢 宮 森與三郎
 一金十錢 岩田 政次郎 一金四錢 寺西 又右衛門
 一金四錢 宮 森助右衛門 一金十錢 宮 森三左衛門
 合計五十六錢
 一金五十五錢 越中國中新川郡若宮村與村忠藏募集
 內譯
 一金四錢 村井清五郎 一金四錢 稻垣 重次郎
 一金四錢 松井作右衛門 一金四錢 松倉覺右衛門
 同人 妻 林 十右衛門
 一金五錢 與村 忠藏 一金四錢 水木 甚助
 林 十次郎 一金四錢 清水 久作
 稻浪 善作 一金四錢 稻浪 傳三郎
 松倉清右衛門
 合計五十五錢
 一金三圓四十一錢四厘 越中國中新川郡正印村山本久右工門
 內譯
 一金五錢 大館 作次郎 一金四錢 山崎 宗十郎
 細川 才次郎 一金四錢 種井礒右衛門
 杉本 久四郎 一金八錢 杉本伊左衛門
 杉本伊右工門妻 一金四錢 山本伊助長男
 山本 宗八 一金五錢 山本 伊助
 石黑五郎右衛門 一金四錢 山本 彌七
 石黑五右衛門 一金六錢 武田 伊平
 山本甚右衛門 一金四錢 岩城 彌四郎
 山田 竹次郎 一金四錢 內田 仁次郎
 杉本與右衛門 一金十錢 齊藤 淺次郎
 杉本伊三郎妻 一金四錢 杉本 與平
 川端安右衛門 一金五錢 杉本 與平
 山本 幾次郎 一金六錢 石黑 庄三郎

內譯
 金十圓 福永 九け子 一金五十錢 西勝寺仁色村尼講
 金十圓 仁色村青年會 一金十圓 全寺住職後藤葆真
 後藤 勝子 金三十圓 後藤 敏衛
 福永 多七郎 金二十圓 福永 丈七
 青田 多七郎 金二十圓 青田 喜左衛門
 松崎 善二郎 金六錢 青田 安二郎
 青田 武平 金五錢 青田 節
 福永 久三郎 金五錢 小林 丈藏
 小林 藤四郎 金五錢 小林 小平
 小林 かつ子 金五錢 福永 開藏
 中須賀源五郎 金八錢 福永 幸二郎
 中須賀 ちゆき 金十三圓 中須賀 ちゆ子
 福永 彌七郎 金十五圓 松崎 ちゆ子
 福永 平太郎 金二十五圓 福永 勝次
 小林 惣八 金六錢 青田 彌吉郎
 小林 源治郎 金八十四圓 村內有志中
 合計十七圓七十四錢
 內譯
 金五十三圓 午居村有志中 一金五錢 前田 九け子
 前田 清八 金三十圓 前田 伊三吉
 中村 久二 金十五圓 前田 ぬき子
 前田 元八 金五錢 中村 ひつ
 中村 ちゆみ 金五錢 前田 實次
 前田 實藏 金十圓 中村 隆寛
 前田 莊平 金四十圓 前田 忠藏
 合計二圓三十三錢
 金一圓五錢 牧野村同行中 一金十錢 青田 熊一

內譯
 金十錢 齊藤利右衛門 一金五錢 杉本 松次郎
 金六錢 石黑 六之丞 一金五錢 石黑 忠兵衛
 金八錢 山本 彌助 金十錢 內田 久七
 齊藤 仁次郎 金五錢 杉本伊右衛門
 岩城 松次郎 金五錢 石黑 六之丞
 九厘正印村同行中 金五錢 先顯寺坊守
 岩城六郎右衛門 金五圓 山本 勇次郎
 杉本伊左衛門妻 一金四圓 山本 彌助 妻
 且保 德秀 一金五十圓 山本久右衛門
 合計三圓四十一錢四厘 越中國上市町常福寺募集
 內譯
 金五錢 水林文左衛門 一金四圓 池田 藤七
 伊東 龜次郎 金四圓 池田 宗次郎
 稻垣 七三郎 金三圓 村上 又助
 某 田 作藏 金四圓 平井 作之助
 池田 幸次郎 金四圓 結城 常次郎
 前田 八次郎 金四圓 池田 次作
 池田 宗七 金四圓 橋本 新次郎
 奧野 和七郎 金五圓 生駒 庄五郎
 松本 伊平 金五圓 金木 三三郎
 今井 清造 金五圓 碓井 久次郎
 堀井 清五郎 金五圓 伊原 宗右衛門
 富樫 太次郎 金四圓 市田 時平
 室 鶴次郎 金四圓 富樫 常次
 松原 鶴次郎 金五圓 池田 久七郎
 齊藤 祐三郎 金四圓 池田 平作
 藤原 宗右衛門 金四圓 富樫 宗一郎
 澤田 甚右衛門 金四圓 澤田 甚右衛門

印度饑饉義捐金第四回報告(本會取分)

一金五錢 中橋 忠作 一金四錢 富樫 宇右衛門
 一金四錢 生駒 利七 一金五錢 土肥 直次郎
 一金四錢 松尾 ツイ 一金四錢 酒井 八三郎
 一金四錢 高橋 モト 一金二十五圓 酒井 繁次郎
 一金一圓三十四圓五厘上市同行中
 一金十圓 松本 小助 一金三十圓 常 福 寺
 合計三圓九十五錢五厘
 內譯
 一金五圓 法潤會
 一金十五圓 榎原 興吉
 一金二圓二十五圓 法潤會第二回
 一金貳圓 眞岡 湛海
 計拾六圓九十八錢四厘也
 全額百三拾貳圓四拾八錢也

京都柳馬場無名氏
 眞宗京都中學樹心會
 若狹 西誓寺門徒中
 若狹 眞宗寺門徒中
 若狹 妙 壽 寺
 同寺門徒中
 楯保 眞宗第三組法類
 矢木 正遵取次
 一金七十一圓八十五錢
 三河 三宅 惠曉取次
 同 同寺 花山 大安 曉
 一金四圓 同 同寺 花山 大安 曉
 一金一圓 同 同寺 花山 大安 曉
 伊勢 遍崇寺壯年教會
 前橋市 増田 嚙音
 一金一圓 同 同寺 花山 大安 曉
 六圓二十錢五厘
 一金十七圓七十四錢
 大阪府 松尾 千代丸取次
 播州 後藤 祐護取次

內譯
 金十圓 福永 九け子 一金五十錢 西勝寺仁色村尼講
 金十圓 仁色村青年會 一金十圓 全寺住職後藤葆真
 後藤 勝子 金三十圓 後藤 敏衛
 福永 多七郎 金二十圓 福永 丈七
 青田 多七郎 金二十圓 青田 喜左衛門
 松崎 善二郎 金六錢 青田 安二郎
 青田 武平 金五錢 青田 節
 福永 久三郎 金五錢 小林 丈藏
 小林 藤四郎 金五錢 小林 小平
 小林 かつ子 金五錢 福永 開藏
 中須賀源五郎 金八錢 福永 幸二郎
 中須賀 ちゆき 金十三圓 中須賀 ちゆ子
 福永 彌七郎 金十五圓 松崎 ちゆ子
 福永 平太郎 金二十五圓 福永 勝次
 小林 惣八 金六錢 青田 彌吉郎
 小林 源治郎 金八十四圓 村內有志中
 合計十七圓七十四錢
 內譯
 金五十三圓 午居村有志中 一金五錢 前田 九け子
 前田 清八 金三十圓 前田 伊三吉
 中村 久二 金十五圓 前田 ぬき子
 前田 元八 金五錢 中村 ひつ
 中村 ちゆみ 金五錢 前田 實次
 前田 實藏 金十圓 中村 隆寛
 前田 莊平 金四十圓 前田 忠藏
 合計二圓三十三錢
 金一圓五錢 牧野村同行中 一金十錢 青田 熊一

一金七錢	青田 太市	一金七錢	青田 平三郎
一金十五錢	青田 藤七	一金二十錢	大和 清一郎
一金十四錢	下垣 村同行中		
一金七十三錢	合金		
一金一圓卅四錢	南田村同行中	一金八錢	奧條村 同行
一金五十錢	新田同行中	一金十錢	福永 ちづ子
一金十錢	三木 吉太郎		
總計金六圓二十三錢			
內譯			
一金二十一圓六十一錢四厘		三河 鷹見圓教取扱分	
成瀬 てる	一金二十錢	塚田 いし	一金十錢
中根 ひさ	一金十錢	鈴木 半蔵	一金十錢
青山 あい	一金十錢	前田 与三郎	一金五錢
松井 喜平	一金十錢	柴田 しら	一金四錢
加納 茂一	一金十錢	青田 ひら	一金四錢
加納 すゝ	一金十二錢	松井 こま	一金四錢
鈴木 源二	一金五錢	鷹見 くわ	一金二十錢
安藤 峰太郎	一金二十錢	鈴木 藤七	一金五錢
同人	一金十錢	加納 銀次郎	一金五錢
柴田 庄八郎	一金十錢	今井 新六	一金五錢
加藤 與六	一金四錢	宮石 いち	一金五錢
前田 みち	一金五錢	金山 はる	一金十錢
太田 吉太郎	一金十錢	山田 藤太郎	一金十錢
篠押喜代三郎	一金五錢	青田 庄太郎	一金十二錢
進藤 正之	一金十錢	原田 さ	一金十錢
本堂 みと	一金五錢	柴田 ちせ	一金十錢
中澤 龜吉	一金五錢	丸井 つな	一金十錢
柳 福太郎	一金四錢	松野 仁十	一金十錢
小田 まつ	一金五錢	中山 栄造	一金十錢
鷹見 市太郎	一金五錢	原田 くわ	一金十錢
川合 常九郎	一金五錢		

一金十錢	矢場瀬 鎌太郎	一金五錢	畑野 三郎
一金十錢	成瀬 茂七	一金五錢	宇野 三郎
一金十錢	内田 菊治郎	一金十錢	成瀬 忠三郎
一金五錢	畑田 鐵治郎	一金十錢	柴田 角太郎
一金五錢	岡田 竹次郎	一金十錢	鈴木 倉吉
一金五錢	原田 鎌太郎	一金十錢	加藤 利三郎
一金十錢	岡田 權平	一金十錢	川合 鈴太郎
一金四錢	杉山 けん	一金十錢	安藤 友太郎
一金四錢	原田 圓次郎	一金十錢	加藤 勝三郎
一金五錢	ま 源三郎	一金二錢	加納 勝三郎
一金五錢	原田 源三郎	一金二錢	加納 梅吉
一金四錢	長坂 乙助	一金十錢	山本 さく
一金六錢	吉 四郎	一金十錢	山本 さく
一金四錢	ま 乙助	一金十錢	池田 五郎
一金二十錢	安藤 彦十郎	一金四錢	ふ 蔵
鈴木 惣右衛門	一金十錢	加藤 いま	
原田 兼松	一金八錢	加藤 いま	
近藤 伊八	一金二錢	都築 岩藏	
岩 柳	一金二錢	宮平 角太郎	
畔野 吉	一金十五錢	安藤 磯吉	
宇野 よ	一金五錢	長川 恒松	
澤田 久七	一金五錢	清水 魯一	
前田 久七	一金五錢	澤田 兼松	
お け	一金五錢	大山 常吉	
岡本 ふじ	一金五錢	大山 常吉	
柴田 じゆめ	一金五錢	宮平 ちづ	
杉山 正三郎	一金五錢	中澤 さく	
原田 宇吉	一金五錢		
前田 與吉	一金五錢		

一金八錢	いし	一金十錢	今井 熊平
一金三十錢	本堂 ちい	一金四錢	中野 はま
一金十錢	河原 はつ	一金四錢	水野 くわ
一金十錢	山本 喜三郎	一金十錢	坂本 徳三郎
一金二十錢	鈴木 うた	一金十錢	近田 龍信
鈴木 はな	一金二十錢	河合 藤七	
佐々 すう	一金十錢	高橋 萬吉	
都築 たつ	一金二十五錢	山田 要三郎	
小石川 たつ	一金二十錢	三 濱 屋	
小石川 たつ	一金十錢	近藤 とみ	
神谷 六三郎	一金十五錢	金山 市郎	
前田 幾三郎	一金五十錢	天野 よね	
木村 三右衛門	一金二十四錢	山 庄 内	
水谷 くら	一金十二錢	河合 いわ	
大山西三郎	一金十錢	山田 茂八	
杉田屋 荒吉	一金三十錢	岡本 佐太郎	
杉田 善三郎	一金十錢	成瀬 芳太郎	
梅村 すよ	一金八錢	伏見 内かま	
藤田 善三郎	一金二十錢	村松 しん	
鈴木 小助	一金四十錢	若 連 中	
柴田 との	一金十錢	高橋 桂二	
杉浦 文の	一金十錢	高橋 桂二	
大竹 たつ	一金十五錢	河合 鶴吉	
大竹 たつ	一金十五錢	加納 勇八郎	
河合 和市	一金十五錢	柴田 勇八郎	
深津 くら	一金十錢	林 京太郎	
青山 紋吉	一金五十錢	中根 藤七	
板倉 又吉	一金十錢	角 孫 内	
成瀬 直吉	一金十錢	中山 定吉	
金子 十二	一金十錢	鈴木 かい	
金子 十	一金十錢	外山 愛次郎	

一金十錢	成瀬 榮太郎	一金五錢	河合 さみ
一金八十五錢	中ノ御所有志中	一金二十錢	深見 ふさ
一金五錢	田中 梅六	一金六錢	加納 喜作
一金五十錢	鈴木 清兵衛		
一金一圓六十錢			
內譯			
一金三十錢	鷹見 ちい	一金三十錢	鷹見 千佐
鷹見 ちい			
鷹見 大信			
華の 井内			
越後新田顯山取次			
內譯			
一金一圓	山本 順治	一金五十錢	山本 金作
新田 祐信		一金十錢	新田 まさ
新田 惠正		一金十錢	兒玉 半七
田 卷 貞次		一金十錢	田 卷 作藏
小林 甚作		一金十錢	小林 與三太
田中 嘉藏		一金十錢	前山 六藏
佐藤 丹治		一金十錢	佐藤 金藏
齊藤 太作		一金十錢	山賀 豊吉
水澤 榮次郎		一金三十錢	石川 政八
新田 顯山			
越後本多大寶取次			
內譯			
新瀉縣上越後中頸城郡佛教婦人妙好人會員			
丸山 みつ	一金十錢	古川 さだ	
丸山 たつ	一金十錢	古川 さだ	
平山 みせ	一金十錢	古川 さだ	
竹田 こちよ	一金十錢	古川 さだ	
丸山 こちよ	一金十錢	古川 さだ	
市村 とみ	一金五錢	市村 すい	

